

COVID-19に関する学内アンケート：自由記述欄の回答を読む ver.1.0

琉球大学の構成員（学生、教員、職員）が新型コロナウイルス(COVID-19)に関する現状をどのように捉えているのかを把握する目的で、琉球大学の政策科学講座・国際関係論講座（以下「政経講座」）が主体となってアンケート調査を実施した。調査の概要については「COVID-19に関する学内アンケート報告レポート」（以下、「報告レポート」と略記）を参照されたい。この調査において、学生、教員、職員いずれも最後の項目として自由に記述する欄を設け、次の質問に対する任意回答を求めた（以下、自由記述または自由回答と呼ぶ）。

Q[番号略] [任意] そのほか、新型コロナウイルスについて、困っていることがあったり、困っている知人や友人がいる場合は、教えて下さい。また、感染対策として、大学／学部／研究科に求めたいこと、提案したいことがあれば、記入して下さい。

この回答結果についての概略と分析を「自由記述欄の回答を読む」（以下「自由回答を読む」）として、ここにまとめる。「報告レポート」と同じく、ver.1が対象とするのは2020年3月31日21時20分から4月2日18時までの回答者1,367名ぶんとし、追加回答は今後のアップデートで取り扱うこととする。

アンケート調査の冒頭部分において、調査結果は「新型コロナウイルスの感染拡大を抑止しながら、琉球大学の教育研究活動を維持する方策を検討する」ための「基礎資料として公表する」、「調査結果は個々の回答ではなく」「集計した結果を公表」するという指針を示した。また誤解を避ける必要から「これは大学本部による意見聴取ではなく、あくまで教員による実態把握のための調査」であることを追記した（「報告レポート」参照）。

これらの指針に基づいて、この「自由回答を読む」では、自由記述のテキストをそのままのかたちで全て公表することはせず、引用する場合も、個人を特定されないようにすること、表現上の適切性を考慮することなどの目的から、調査者によって表現を改めた箇所があることをお断りしておく。

1. 総論

まず、緊急で短期のアンケート依頼に対して、自由回答を記入した件数の多さ（331件/1367人）は注目に値する。この調査開始時に、調査が大学当局による

ものとの誤解があったことは「報告レポート」にも示したが (ver.1, p.3 参照)、自由回答欄にも誤解に基づく記述が数件あった。と同時に、こうした意見を聞く機会を求めているという主張も、例えば次のような意見に伺える。

今回このアンケートが回ってきて、コロナに対する危機感を持って具体的に学生にアプローチしてくださる機会に触れることができるとても安心しましたし、嬉しいです。

迅速な決定が求められる危機管理対策はトップダウンになりがちだが、組織が構成員の意見を汲み上げて対策に活かすことの意義を示している。

次に、琉球大学、あるいは一般的に大学において、学期が開始されれば「クラスター感染が起きてもおかしくない」「起きるだろう」との認識を多くの回答者が持っていたことが指摘出来る。この認識を踏まえて、「判らないことが多すぎる」「37.3度は登校してよいのか」といった不安の表明もあるが、事例や対策など具体的に踏み込んだ内容が多数だった。

多くの記述は、他大学、他都道府県、そして海外の事例を参照し、比較分析して、琉球大学の方針に提言するものだった。他大学の事例としてすでに決定されている「授業の開始延期」の提案、延期後の開始時期としてはゴールデンウィーク明けという時期が目安感として広く共有されている様子が伺えた。

(補記) アンケート調査期間は、琉球大学が方針を更新した期間と重なっていることに留意したい。講義の実施に関連して大学は「基本的な考え方」(4月1日)、「学長からのメッセージ」(4月2日)、「(教職員向け)ガイドライン」「(学生向け)講義等の実施について」(4月3日)を、大学ホームページのお知らせ欄 (<http://www.u-ryukyu.ac.jp/news/>) で公表している。

総論としては、アンケート回答者の多数を占めた学生からの自由回答が、かれらの生活範囲や活動領域の多様性を雄弁に物語っている点も指摘しておきたい。大学執行部や危機対策本部、教職員では十分にフォローできていない観点が多く含まれているからである。

2. 多様な立ち位置から求める感染症対策

自由回答からは、立ち位置によって多様で異なる対策の想像力が伺えた。その上で、グローバルな移動を身近で日常的な経験として持っているという前提から、感染症の危機を捉える意見が多かった。

例えば、「学生」といっても一括りにできない、県内生/県外生という見方、留

学生、新入生、大学院生などの多様な立場が表明されていた。また、アルバイトによって学生たちは、大学キャンパスとは異なる人びととの接点を持っていることが判る。学生たちもまた、年少者・高齢者や障がい者の養護・介護の現場、グローバルな観光業の現場など、日常的に特定不可能な人びとと接している。これを踏まえて、感染がキャンパスに持ち込まれる不安、キャンパスの感染が地域社会に影響を及ぼしてしまう不安が語られていた。

授業の必要性も立場によって多様な観点が表明されていた。公務員試験や教育実習を控えて早めの方針決定を求める声、医学部生や介護職を目指す分野など資格取得や認定に関わる必修科目について「学習権の保障を」との声があった。また、学校や病院への感染拡大を恐れる声は、附属学校や附属病院を擁している大学ならではのリアリティを持っている。

「困っている知人や友人」との問いかけ文に対して、持病や基礎疾患の具体名を挙げつつ友人学生や家族に配慮する声がとても多かった。

もし僕がウイルスを持ち込むと身内が重症化してしまう恐れがあります。なので僕はこのウイルスが治らない限りは学校にはいきたくありません。

アルバイトで障害者の介助をしています。仕事柄、日頃から感染症への細心な注意を行なっていますが、もし感染してしまうと重篤化する可能性が高い利用者が殆どです。多くの人が集まる大学に行くことに対してとても不安を持っています。

教員からは、非常勤講師の権利保障の訴えも上がっていた。職員からは、沖縄県の対応にあわせるのではなく、国立大学自らが率先して、感染拡大を予防する措置を求める意見、学外利用者についての対応マニュアルを求める意見など具体的な声があった。

(補記) 大学等非常勤ユニオン沖縄は、沖縄県内の大学に対して講義開始の延期を求める緊急要請を4月1日付けで発表している(『琉球新報』2020年4月3日ほか)。

3. 授業開始の延期を求める声

授業開始は5月前半にしたほうが良い、という意見が定量的分析で多数を占めていたことは「報告レポート」に示した通りだが、同じことが自由回答にもい

える。自由記述から見えてくるのは、その理由である。年度末と年度始めの人の移動にともなう危機感を表明した記述が多く見られた。

4.授業開始延期以外の意見

前述の延期提案以外で、大学の提示した対策に関する意見として、まず、教室の安全性確保は困難だという不安は広く共有されていた。特に、「3密」回避の難しさへの具体的な言及が多数みられた。消毒液（学寮への言及もあった）、マスク（入手できない、足りなくなるなど）などは、今後も充分に行き届かないと考える意見が多数だった。

これは教室の問題に留まらない。図書館、共用PC設備、学寮、サークル棟などへの対策が行き届いていないという現状の指摘が多数あった。授業開始の判断において、単に教室の対策に留まらない波及を考量する必要があることが判る。独り暮らしの学生は、学食の「ミール」が中心となりがちなので、生協食堂への不安の声もあった。

次に目立つのは、欠席の取り扱いへの不安や要望である。これは次項で採り上げる。このほか、琉球大学の履修登録の一連の手続きは紙媒体でのやり取り、対面式での登録調整が行われており、「アナログすぎる」これらに対する不安の声があった。

オンライン化が加速化することを想定して、学生のネット環境格差、パケット不足、アクセス集中に対する大学サーバーの脆弱性への不安の声も見られた。

このほか、通学手段（運転免許、自家用車を持たない場合）の不安、島嶼県であることから、感染拡大による医療機会の不足が被害を拡大するという懸念も見られた。学生の移動について、2週間の自主隔離の要請が行き届いていないとの指摘も上がった。

5.具体策などの提案

個別の具体的な提案も沢山あった。Zoomなど活用した遠隔授業、メールによる課題、検温装置の設置、少人数での実験の提案のほか、できる限り短い時間で帰宅できるよう授業時間の短縮の提案もあった。

遠隔授業に対する不安は、学生よりも教職員のほうが強いというのが「報告レ

ポート」の分析結果に見られた。その背景として、遠隔を可能にする技術的環境整備の現実認識の差異があるだろう。教員の技術を疑問視しているという偽らざる正直な学生の声も確認しておこう。

(学生から)

海外の大学はすでに残りの全ての授業をオンラインにしている所がほとんどです。

現在留学先の大学のオンライン授業を受けているが、今のところは問題なくここ2週間は過ごせている。

機械音痴の教員にサポートをしてほしい。

(教員から)

遠隔授業は今の琉球大の状況から考えると、全面実施は難しいと思います。準備時間も設備も整ってない上、実習系の授業、特に理系科目は遠隔授業に振り替えられるものはさらに限定されるでしょう。ちなみに、すでに実施している海外の大学の事例を見ても、遠隔授業では回線がみだれたり、つながりづらいなど様々な問題が生じています。おそらく遠隔授業を実施するにしても一部の授業に限定されざるをえないわけで、その他の多数の科目は、結局、授業開始を先伸ばしすることでしか対応できないのではないかと思います。

公休・公欠の措置に関しては、ウィルス拡大抑制のための自主的欠席を認めること、出席確認は今年度に限り行わず3分の1欠席不可もなしにするなどの措置や、体調不良の際に報告しやすい、休みやすい環境作りが必要だとの提言があった。

「社会的距離を確保すること(social distancing)」については、状況を想定して具体的、かつ科学的根拠をもった数値基準を示すべきとの意見が挙がっていた。

学費を賄うためのアルバイトが減少するなど経済状況の悪化を予想して、学費の減免、学費納入期日の延長を検討して欲しいとの提案も見られた。

このほか、サークル活動や新入生歓迎行事にも、大学が禁止あるいは自粛要請するなど、関与してほしいとの意見、春休みの県外・海外の旅行等の人数・行き先などの実態、感染者の情報公開をしてほしいとの意見も上がった。

6. 大学の方針に対する意見

大学の方針とその公表については、「楽観的」「対策や方針決定が遅い」などの厳しい意見が多数挙がったが、冒頭の 1.総論で補記したとおり、アンケート調査期間は、大学が段階的に方針を明確化する期間と重なっていた。大学が授業開始の延期を許容する方向を示したことは、全体の 39.6%が 5 月前半、18.9%が 4 月後半と回答したアンケート結果が示す方向に沿っており（「報告レポート」p.3）、対策本部と、大学構成員との間で、この調査期間の間に起こっていた意見調整の動態を彷彿するものといえる。

一般に呼びかけられている 2 週間の待機と、授業開始日の設定が齟齬を来すことなど社会で呼びかけられている対策と関連付けた意見が多く見られた。なかでも、他大学の措置に言及するもの（授業開始時期の延期措置のほか、沖大の自宅学習期間、留学先が実施しているオンライン授業など）が多かった。

「感染者が出たばあいの責任は誰が、どのように取るのか」といった厳しい表現、他大学で起こったクラスター感染に学んで欲しいとの切実な訴えのほか、自粛に任せない強い呼びかけが必要だとの声、医学部に対して、感染爆発を想定した受入態勢の準備を望む声もあった。

7. 学生生活に関すること

「報告レポート」で確認した通り、回答者の多数が学生であったため、学生生活についての意見もまとめておきたい。4 月の新入生歓迎の時期であり、特に新入生に対して、学生同士の交流の場がなくなることを心配する声、夏休みや GW はしっかり確保してほしいとの意見などがある。また就活の日程はどうなるのか、延期措置をとる首都圏の大学との差が生じるのかなど、就職活動をめぐる不安の声もあった。

8. 移動をめぐる記述について

海外や県外から移入したウイルスに地元出身者が感染し、それが家族や知人に感染するのではないか、という懸念が、多数の記述に表れていた。

やはり、県内生は自宅通いが多いため、家族にうつすのも怖く外出を控えた

り、日々気をつけている。県内生と県外生の環境で、その意識が違ってくると思う。

感染者の多い県外地域から引っ越してきた学生は、自分が感染しているのではないか、周りに感染させるのではないか、という不安を特に強く持つと考えるのが自然です。そうした学生の不安を取り除くには、授業開始を延期すべきと考えます。

不安を背景にして、出身や移動による家・内と外とを線引きするイメージが現れていることが伺える。これに対して、県外からの移入者（国内、海外）を蔑視する雰囲気が生まれることを心配する意見も挙がっていた。

9.注目した記述

以下に、自由回答から調査者が注目した記述を抜粋した。なお、冒頭で示したとおり、自由記述のテキストをそのままのかたちで全て公表することはせず、引用する場合も、個人を特定されないようにすること、表現上の適切性を考慮することなどの目的から、調査者によって表現を改めた箇所があることをお断りしておく。

(1) 学生の自由記述から

大学組織内の方々の意識の低さに困っています。学務に対応を求めたところ、「大学の方針だからなんとも。感染者がでたら、対応かわるんじゃない?笑」と言われました。大学全体の方針でなくても、独自に学生の不安を先読みし対応を取っていただきたい。学生の不安を聞く懇談会などあれば遠隔でも参加します。

大学は、海外・県内外から人が集まる特殊な空間です。世界的に拡大防止に取り組まなければならないなか、大学の方針と無対応ぶりに大変困っています。

なぜ、安全など考慮しないで今授業をはじめる理由があるのか大学側に答えて欲しいです。医学部もあるのですから、そういった専門家の意見は聞かないのでしょうか?

予定通り授業を始めると言われてしまっただけでは学生はそれに従うことしかできないので、授業の開始時期を再考していただきたいです。

状況を見ながらの判断になると思いますが、現状を考えると発症はせずとも感染している人々は多くいると思います。「若い世代」に限られたことではないと思います。しかし、4月から講義をはじめるということは、学生、そして職員の生命と自由に大きく関わります。つまり、大学という場所において安心して論文を書くことが不可能であるということです。せめて、5月後半あるいはそれ以降であればあるほど感染を防ぐことは可能ではないかと思いません。

教室にアルコールとマスクの設置、使用された机は綺麗にアルコールで除菌することを徹底して欲しいです。風通しをよくすると言っても、4月後半、5月から沖縄はとて暑くなります。ゴールデンウィークがあけたら、梅雨の時期です。現実を考えると教室で講義を行うことは可能ですか？

首都圏の大学や私立大学は既に日程を遅らせる対策を取っており、東京都立大学などはGW後という。22年卒生としては、首都圏の大学との日程の乖離が生まれることで、県外就職活動がしづらくなるのではと考えている。また、単位や卒業条件に関しては、コロナになったもん負けの現状であり、感染後も自宅で欠席分を補填することで予定通り卒業をしたいと思っている。今の大学の対応では、コロナに似た症状が現れても黙って大学に通うと思う。

僕は交換留学から帰ってこなければならなかったもので、現在留学先の大学のオンライン授業を受けているが、今のところは問題なくここ2週間は過ごせているので、琉大も落ち着くまではオンラインにするべきだと強く感じます。県外から帰ってくる人も多いと考えると、せめて現行のスケジュールでいくにせよ、3週間（最初に2週間は潜伏期間、1週間は余分に）はオンラインに移行したほうが”十分な対策”への一歩だと思います。

飲食店など経済関係で働く方々は2週間お店が開けないことも大きな痛手になると思います。ですが大学（学問）で例えば生徒が1か月授業が始まるのが

遅くなったとして、あまり影響がないと感じます。今この状況で、通常通り4月前半から入学式、授業を行なっていくのであれば、その選択をした理由、その選択をしなければいけなかった理由をしっかりと公表していただきたいと大学側に思います（このアンケートは教員側で行なっているものであるため本来大学に伝えるべきですが…）私がワーキングホリデーで住んでいたカナダでは3月中旬の時点で小中学校は3学期が丸ごと休み（9月まで休み）が決まりました。他国と比べてもしょうがないかもしれませんが、なぜ、安全など考慮しないで今授業をはじめ理由があるのか大学側に答えて欲しいです。医学部もあるので、そういった専門家の意見は聞かないのでしょうか？

教育学部は小中学生や高齢者、障がい者の方々と関わる機会が多々あります。若者はウイルスに感染していても症状が出にくいとも言われている中で、もしかすると発症している学生がいることも想定できると思います。最近では京産大の学生から他県の学生に恐ろしいスピードで感染拡大しています。琉大生が接触している事も考えられます。私達の学習のために周囲を危険に晒すことは間違っていると思います。

大学での授業は、共通の授業は特に席の間隔をあけられないぐらいたくさんの生徒がぎゅうぎゅうになりながら受ける授業が多いと思います。履修登録表配布も、3年次はプログラムごとにわけられていましたが、1,2年次は学科ごとでしかわけられておらず、たくさんの方がいる中に行われます。他にもいくらかでも感染する可能性はたくさんあります。琉球大学はたださえ学生の数が多いです。そこで集団感染なんておこったら大変なことになります。それを避けるためにも、学校が始まるのを延期するか、遠隔授業を行うべきだと思います。学校側にも色々事情があってこれらの対策を行うのは難しいかもしれませんが、できる限りの事はして欲しいです。私達を守って欲しいです。お願いします。

呼吸器系の疾患がある友人も、自らが注意しても教室での講義という三密に近い環境では、感染から重症化のリスクが大きく通常通りの開講にとっても不安を感じています。私自身も、同居する高齢の祖母へのウイルス媒介者になるのではないかと危惧しています。現状を踏まえて「正しく恐れる」ような判

断・対策を切に願います。

大学生はこの春休みに帰省をした人が多くいます。私の友達でも、内地に帰ったり、この時期に不用意に海外に行っている人が多くいます。そして彼らは多くが3月末や4月第一週に帰省するわけです。つまりこのままの日程では誰かが感染していた場合、潜伏期間内に履修登録表配布や授業開始となるのが危惧されます。そして大学の授業では3密の状態がつけられやすくなります。私は全国で4月からの大学授業開始が発端となり日本で爆発的な感染拡大が広がるのではないかと考えています。琉球大学に限らず、全国の大学が当たり前のように4月からの授業を延期すべきだと思います。

(2) 教員の自由記述から

受講者100名を越す授業においてどう「密」を避けろというのか、不可能なことが現場に求められていると言わざるを得ない。

どうしても教室でないといけなくてかつ多人数ではない授業だけをリストアップして教室の割振をし直すしかないのではないか。

非常勤講師の給与と雇用機会の保証が必要。

学生向け、教職員向けなど、コロナ関連ウェブを見やすく整理し、必要な情報をわかりやすく発信する、全ての学生が遠隔教育を受けられるIT環境整備(zoom法人契約、教育用iPadの整備、ネット環境など)、衛生環境整備(アルコール、マスク配布)

少人数の授業であれば、さまざまな対応が考えられるが、この状況での共通教育の実施は無謀だと思う。せめて定員を半分にして1/2学期ずつ行うなどの対応が必要。換気が奨励されているが、冷房中も、あるいは風雨が強い日でも窓を開放するのか等についての指針がほしい。

大学の場合、夏休みが長いわけですから、その期間を使うことを決めれば、授業開始を1~2か月程度先伸ばすことでの問題はさほど生じないでしょう。夏休みだけで規定コマ数を消化できなければ、後期も含めて学年暦を全体的にずらすことも考えてもいいかもしれません。

また、授業開始を遅らせる場合、非常勤講師の休講分は休業補償すべきだと思います。そのために、非常勤講師は学期や年間を通して他の仕事を入れず、その時間帯を授業のためだけに確保しているわけですから。

文科省も講義を10~15回と弾力的に行ってよいとやっていることからすれば、4月は開講せずに様子を見るのがよいかと考えます。

1)留学希望者で休学申請した/する予定の学生の受け入れ先入国拒否による授業、授業料等の問題、2)介護実習教育実習先の機関の受け入れ拒否の可能性と代替措置不可能による卒業単位免許要件不充足の可能性の不安、3)学科別オリエンテーションやれと言われているが、社会的距離の基準がないこととあったとしても社会的距離を確保できる配慮、教室配置がないため、リスクが抑えられないこと、4)卒論構想発表会の実施可否。

大学当局への要請は、1)マスクとアルコール消毒剤の必要分の配布、2)会合や授業の実施の際の国際的な基準に基づく厳格な基準の導入、3)GW明けからのオリエンテーション及び履修登録の開始(少なくとも)

Improvised e-learning is simply no replacement for "real" classes. For instance, I teach many Oral Communication classes in foreign languages. How should I teach that online, with no support, little preparation, and very few tools available?

色々な授業形態があります。大学で一つの方針を定めるより、履修者と科目担当教員が相談し、前期については柔軟な対応が許容されるのが良いと思います。

大学側は最悪の事態、すなわち沖縄のロックダウンが起こった時のことを考えて何通りかの対応策を考えておくべきだと思います。その際に常勤講師が

とるべき行動(学生を感染から守るために大学としてできること、教員が感染した場合に学生に移さないようにするにはどうすべきか、など)、非常勤講師への給与支払いなど、細部にわたって検討しておき、それを事前に教職員に示すべきだと考えます。

琉球大学の対応には、social distance について具体的、かつ科学的根拠をもった数値が示されていない。何を基準に「近距離」とか「多くの人がいる」という状況を想定するのが、明確に示すべきである。

特に第1回目の授業では、登録調整のため、学生の集中・混雑が予想される(共通教育の定員が多い講義など)。コロナ対策の観点から、これをいかに回避するかについて、至急、具体案を示して貰いたい。

1. 密閉・密集に近いことが想定される授業については、授業をやらない権利を認めてほしい。(自分の安全を守るための当然の権利だと思う。) 2. 「不安なので欠席したい」という学生の権利を認めてほしい。(同前)

国の統計や基準ではなく、国際的な基準、動向、研究を含め判断をしてほしい。医療関係者からの情報でも今後の厳しい予測が示されている。県の医療リソースは厳しいものがあり、地域全体への影響も考慮する必要があると思う。

授業のスタイルについてはオプションを広くとってほしい。この状況で精神的に教室で対面で授業をすることはストレスになることは理解してほしい。「わがまま」ではなく、一つの選択として考えてもらいたい。他大学では講師に学生の健康チェックをさせる非常に問題のある対応もしている。対面でやる授業の人たちもそのような任務を負わせることのないようにしてもらいたい。

(3) 職員の自由記述は、サンプル数が28件と限定的なので、この ver.1 では個別の意見としての紹介はしない。